

(7) 巡礼第三日 パラス・デ・レイから



メリデまで 15.0キロ

10月23日(火) 巡礼第3日、7:00起床。窓の外の暗い道路が小雨に濡れて光っている。

スペイン北西部のガリシア地方は“雨のガリシア”と言われるだけあって雨が多い、だから緑が豊かで牧畜が盛んで特に牛が多い、だから巡礼道のいたる所で牛糞を覚悟せねばならない。だから雨のドロコ道は大変だ、と思いながら、何故だか自然に西田佐知子の歌を口ずさんでいた。



部屋での朝食。ポンチョ、スパッツ、雨装備を整えて8:00出発。歩き始めて30分もしないうちに雨が上がり気温も上昇。町を出たところで雨具を脱ごうとした石川、「いっけねえ、キィー、キィー!」「またかよ!」大慌てで宿屋へ携帯電話する。しかし、石川の流暢な英語も通じない、身振り手振りも相手には見える筈もなかった。出発前に矢島から届いたeメールの“巡礼用の即席スペイン語講座”にも“カギ”という単語は見つからなかった。歩いてきた約3キロ、往復6キロを逆戻りするのはいきつい。困った挙句、矢島に電話で助けを求め、宿屋に連絡して貰う。おかげで、カギはメリデの宿屋に預ければよいことになった、やれやれ・・・皆ホットする。

今日の行程は15キロと短い森の中の起伏が多い道。曇っているのに陽はないがむし暑い。雨具も長袖も全部脱いで半袖のTシャツ1枚になる。上りになると前を歩く石川の足が遅くなり、荒い呼吸がハアーツ、ハアーツと激しく聞こえる。

朝食は宿の部屋で食べたマドレーヌ1個とオレンジジュースだけ、腹へったなあ。出発から9キロ地点、レボレイロ村のバルでやっと休憩。他の巡礼組で賑わっていた。(写真右)



後半、むし暑さが疲れを加速させる。竹内だけの“おしゃべり独演”・・・何か喋っているのだが他の者は疲れのせいもあって相槌の言葉もなく、唯々黙々と歩くだけ。今朝、足首から甲の辺りが変な具合に痛むと言っていたが、お喋りだけは元気に続けている。

メリデの町が近くなった。中世のローマ橋(写真下)を渡ると石造りのサン・フアン・デ・フレエロス教会。入口に“セージョ”と書かれたダンボールの切れ端が無造作に立てかけてあった。

中に入ると白髪で体格のよいパドレ＝神父が、先に到着していた巡礼者のクレデンシアルにセージョを丁寧に押し、それから、日付を丁寧に書き込んでいく。終わるのを待ちかねた竹内がパドレに紙片を見せた。矢島に頼んでスペイン語に訳して貰っていた“巡礼の動機”や“霊名”（彼の霊名は“サンティアゴ・デ・コンポステラ”）などが書かれている、と、竹内の顔をしっかりと見直してからパドレはガッシリとハグ・・・言葉は要らなかった。



ローマ橋を渡るとサン・フアン・デ・フレーロス教会が



聖堂内右側の白壁にクギ痕の付いた右手をだらしと下げた“主イエス”が、左手だけで十字架にぶら下がって架かっていた。（写真左） 一体どういうことなんだ！？ その姿の意味を考えながら大口を開けて見上げる。そして暫し黙想・・・。パドレがわざわざ我々のために、その十字架の名刺大の写真を、奥の香部屋から持って来て一枚ずつくださった。

巡礼道を反れてメリデの町中を通る広い街道を横切り、郵便局から脇道に入ってしばらく進むと、宿屋 Hospedaje El Molino の受付になっているバルがあった。少し英語を話す宿屋の娘、若女将に先ず石川が例の“キイー”を渡してから今日の部屋のカギを受取った。既に届いていたモチーラを担いで、別棟の宿泊棟 2 階までよろける様に運び上げた。すぐにシャワーを浴びながら、疲れていても絶対ためてはならない洗濯を済ませる。宿泊棟の外の広場に洗濯干し場。再びバルに戻ると宿屋

の家族 5 人が揃って昼食、その“まかない食”があまりにも美味そうなので同じものを食べさせて欲しいと頼むと、お母さんが「シー、シー、いいわよ」と快く応じてくれた。ところがこの後、ちょっとした不覚の事態が、（続く）